

沖縄の久高島を巡って、共同生成しつつある幾重もの語りの渦

やまだようこ 2011年4月20日

「共同生成しつつある幾重もの語りの渦」のころみの一環として、写真家、比嘉康雄さんが亡くなる数ヶ月前に残した最後のインタビューを記録した映画『現郷ニライカナイへー 比嘉康雄の魂』（大重潤一郎監督）に触発されて、これを書いています。

比嘉康雄さんとの出会いー1995年

2011年1月に、私は比嘉康雄さんの没後10年を記念して、那覇美術館で写真展『母たちの神』が開催されるという噂を聞きつけ、矢も立てもたまらず沖縄に出かけました。これは、比嘉さんが厩大に撮りためた写真のなかから生前自分で選びを選んで、写真集を発刊するために構成していた未刊本『母たちの神ー琉球弧の祭祀世界』162枚が、10年をへて日の目を見たものです。

私は、かつて比嘉さんの本『神々の原郷 久高島（上下）』（第一書房）という分厚い2冊本に出逢ったときのことを忘れることはできません。それは1995年9月のことでした。私が1988年に『私をつつむ母なるもの』を出したあと、『この世とあの世のイメージ』を研究しはじめたころでした。

『私をつつむ母なるもの』で得た基本イメージは、「私」（自己）をつつみ育む「母なるもの」は、人間というよりも文化的場所（トポス）であり、文化が継承され世代を越えた物語が紡がれていく場所であるというものでした。

そのころの私は、その基本イメージをさらに発展させる研究として、『この世とあの世のイメージ』、つまり、今ここで生きている私たちの居場所（この世）と、かつて生きていた死者たちの居場所（あの世）の関係性を問うという難しいテーマに挑み、苦闘していました。この本は、昨年末2010年12月に、16年かかって、ようやく世に出したところです。

比嘉さんの本は、久高島のフィールドワークと聴き取りから、母と祖母と死者（祖霊）がつどい、この世とあの世のかけはしとなる「御嶽（ウタキ・場所・トポス）」で展開される祭祀を緻密に記録したもので、対象や方法はちがっても、追い求めるテーマとイメージが重なっていました。

私は、比嘉さんの本を読んで深く感銘し、彼に手紙を書き、那覇へ会いに行き、あこがれの久高島へも行きました。彼はそのころ、すでに久高島を去り、宮古島のフィールドワークにはまっていました。私は、彼に誘われて宮古島に行き、外部の人が立ち入れない「御嶽」の森で、夜通し行われる、いくつかの祭祀をつぶさに体験しました。

私が今までの人生で出逢った人で、心底から尊敬できる人は多くいますが、比嘉康雄さんは、そのなかでも指折り数えて10人に入るほど、強い印象を残しました。彼は、写真家だったのでしょうか？フィールドワーカーだったのでしょうか？研究者だったのでしょうか？どの枠にもおさまらない、そしてそれらの枠を超えた凄い人でした。

どこが凄かったのかというと、その信念と徹底したフィールドへの入り方と記録のしかたです。

やさしい人でしたが、記録への執念は鬼のようで、筋を曲げない厳しい人でもありました。彼は、久高島に100回以上、数十年通って、ようやく本をまとめています。宮古島の祭祀と一緒に見たときも、彼は宮古島にアパートを借りて移り住むほど入れ込んでおり、同じ部落に何度も通い、同じマツリを何度も見、その都度深く感心し、写真、音声、文字、ビデオなど、あらゆる記録をすべて残そうとしました。写真家が、「写真」として美しい、あるいは珍しいシャッター・チャンスをとらうような撮り方ではありませんでした。写真家は「写真」だけを独立した美意識でアピールしますが、彼の写真はちがいました。ほかの大きな使命のための道具としてカメラがあるにすぎないように見えました。いくつものカメラをぶらさげて、今を逃したら、もう二度と巡り会えないという焦燥にかられ、自分に与えられた有限の時間と闘っているかのように、次ぎ次に撮りまくっていました。

彼が自分の病気や死の近さを知ったのは、ずっと後のことなので、そのとき、自分の天命を予感して、残された時間が短いと感じていたわけではありません。たぶん、「人のいのち」の短さと、「琉球弧で綿々と伝承されてきた悠久の時間」とが、いつも天秤にかけられていたからではないでしょうか。

彼は、研究者以上の勉強家で研究熱心でしたが、研究者が、自分のテーマに会う情報を効率よく収集するような調査方法をとっていませんでした。彼は、集落で繰り広げられる日々の生活や人間関係の細部と、大きな宇宙観や世界観まで、すべてがつながっていることを知っていました。そして、不器用で一途で、徹底して地を這うような仕事をしました。しかも、当時、彼の仕事は地元でもあまり認められておらず、「理解してくれる人は、ほとんどいないんだよ」と苦笑いしながら、孤独に奮闘していました。

故比嘉康雄さんとの再会－2011年

比嘉康雄さんの『母たちの神』は、それまでの彼の写真集のように、特定の地域の祭祀や記録ではなく、ローカルな個性を消して、それらを縦横に混ぜて、「神迎え」「神崇め」「神女」「神願い」「神遊び」「神送り」などの単純な物語にそって構成されていました。

最初写真展を見たときは、個々の祭祀も年代も地域も季節も関係なく、一連の物語の系列にそって写真が配列されていることに、少し違和感がありました。しかし、彼は、たぶん彼が執念のように追いかけてきたローカリティやディテールへのこだわりを捨てて、新しい境地に出たのではないのでしょうか。

ごく基本的なイメージだけを簡潔に表象して、それがすべてを表していると・・・、あとの歴大な資料や記録は捨ててもいいんだと・・・、もう世界はこんなにクリアーでシンプルであきらかに見えるのだと・・・、何もかも鬼のように必死に記録しなくてもいいんだと・・・彼が語りかけているようです。

それでも私は、これらの写真がいつ、どこで、撮影されたのか、彼の足跡を詳しく追わずにはいられませんでした。そして、一緒に見た宮古島、西原（ニシベ）のユークイ（世乞い、豊穰祈願のマツリ）の写真が4枚も選ばれていて、なじみの人たちの顔を見つけたことが、うれしくて

見飽きませんでした。

故比嘉康雄さんがとりもつ縁と新しい物語のはじまり

那覇の美術館を出たあと、京大卒業生で、沖縄でルーツという人材会社を経営している今津新之助さんと沖縄料理を食べることになりました。そこで、学生時代には伺いしれなかった彼のライフストーリーを聴く機会をえました。優等生で順風満帆だった彼が、若くして根治できない病を抱え、自暴自棄から人生の生き方を変えていく話は、ちょうど、院生のみなどと読書会で読みすすめていたマクアダムスの redemptive narrative (救済の語り) そのものでした。

しかし、そこから再び・新しい物語が急速に展開するとは、思いもよらないことでした。1月末には今津さんに京大で講演をしていただきました。そこへ京大心の未来センターの宗教学者、鎌田東二先生も来られて、一気に互いのネットワークが生成的にむすびつき、輪がむすばれて広がりました。

実は、沖縄に行ったときに、今津さんも頻繁に久高島を訪れていることがわかり、改めて何人かの人々を紹介してもらって、再度久高島に行ってきました。そこで「京大の鎌田先生を知っていますか？」と尋ねられて、場所が一巡して、身近なところにネットワークのサイクルがまわってむすばれたのです。

鎌田先生は、映画『久高オデッセイ』の制作者でした。そして、『久高オデッセイ』監督の大重潤一郎さんは、比嘉さんの最後の語りを映画『現郷ニライカナイへー 比嘉康雄の魂』に撮ったことをきっかけにして、比嘉さんの意志を自発的に継承し、死後に自分が久高島の世界観の映像化を生成的にひきつぐことを決心した人でした。彼は、神戸から沖縄に移り住み、『久高オデッセイ』を撮影しました。助監督の須藤義人さんや手伝った大学生たちも、その後、沖縄に居着いて独自の活動をしています。

比嘉さんは、「人間とは何か」を真摯に問いつづけた、心から尊敬できる凄い写真家でした。死を前にして「あかるい」彼の語りは、死生観としても、ライフストーリーとしても、イメージーションや物語の力としても、沖縄という土地を越えて、現代文明の行き着く先とこれからの生き方を深く考えさせられます。

『神々の原郷 久高島 (上)』の序文で比嘉さんは、次のように書いています。

シズさん亡き後、久高島の祭祀世界も変容しつつあることを知るとき、先代外間ノロがその変容を予感して、何百年も連綿と続けてきた久高島の祭祀世界を、シズさんにすべて伝受したこと、そうして私は西銘シズさんをとおして、その記録者の一人になれたということ、このシズさんとの出会いは、私にとってすばらしい体験であった。残念ながら、この記録の結果をシズさんにお見せすることはできないが、きっとシズさんはあの世からこのことを見て喜んでいて私には思えるのである。(1993年)

比嘉さんは、久高島で祭祀の伝承者、西銘シズさんと出会い、シズさんとはちがう方法でその

祭祀世界を生成的に継承しました。ようやく比嘉さんが、その記録を世に出すことができたとき、いちばん喜んでくれるはずのシズさんは、この世にはいませんでした。大重さんは、比嘉さんの最後の語りを映画に撮ったことで久高島に出会い、比嘉さんとは異なるやりかたで、久高島の世界観を映画にしました。ようやく大重さんが映画を世に出したときには、比嘉さんはこの世にいませんでした。こんな風に、綿々といのちのサイクルが受け継がれながらつづいていく、世代継承の働き、生成継承性 (generativity)、本当に興味深いものです。

いま、また新しく、いくつかの渦が連動して、沖縄関連のプロジェクトが動きはじめています。今年の夏には、久高島への「島留学」などの新しいプロジェクトもはじまるかもしれません。この秋の日本心理学会では、下記のようなワークショップの企画をしています。

まだまだ語りつくせない、長い長いライフストーリー、いくつもの人生の、いくつもの物語がからまって、なかば必然、なかば偶然に出会い、今、ここで渦をつくって生成しながら、動いているところです……。関心のある方は、ぜひ、この物語の渦のなかへ、共同生成のプロセスに参加ください。

日本心理学会 第75回大会 WS (日本大学文理学部 9月15-17日)

映像によるヴィジュアル・ナラティブの生成—「いのちの原郷」としての沖縄

ナラティブ(物語・語り)研究の新しい方法として、言語中心の語りに対して、視覚的イメージを重視したヴィジュアル・ナラティブの方法論に注目してきた。今回は、「映画の実作者による生成プロセスの語り」をもとに、イメージと映像、映画の筋立て方と物語、映像とナレーション、記録ドキュメントなど、映像の力と言語の力について討論する。

沖縄の聖地であり、神の島といわれる久高島を舞台に、人々の生活と自然と祭祀と死生観と伝統継承の姿が『久高オデッセイ』『久高オデッセイ—生章』という二本の映画になった。宗教学者・映画制作者である鎌田東二氏、映画監督の大重潤一郎氏、助監督・映像民俗学者で『久高オデッセイ—遙かなる記録の旅(晃洋書房)』の著者である須藤義人氏を、話題提供に迎える。沖縄の伝統文化を深くフィールドワークした写真家、故比嘉康雄氏の『写真』も加えて、「フィールドワーク」「映画」「写真」「記録」「語り」の関係を縦横に語りあいたい。

企画・司会 やまだようこ(京都大学大学院教育学研究科)

話題提供 鎌田東二(京都大学こころの未来研究センター)

話題提供 大重潤一郎(沖縄映像文化研究所)

話題提供 須藤義人(沖縄大学人文学部)

指定討論 石井宏典(茨城大学人文学部)

竹内一真(京都大学大学院教育学研究科)